

[日時]

2017年7月7日(金)

[司会・進行]

楢橋修(准教授)

[担当学生]

大崎真幸 小林諒 佐野旭 田川美那海 中井修二 東美弦 松井智美

松田星斗 山本雅則 山本修大(M1)

中島安奈 松井優香(B3)

## 『状況』を建築する

**遠藤 克彦** 建築家/遠藤克彦建築研究所

### 講演概要

タイトルの「『状況』を建築する」は遠藤氏のこれまでの建築活動を振り返り、今の建築に対する考え方をまとめたタイトルである。建築をものとして捉えるのではなく、経済、社会という大きな枠の中でどう捉えるのか。物を作り、建物を建て、人が住むだけではなく、経済活動などの影響を含めた全体的なことを捉えた言葉が現代ではない。建築だけではなく、その周辺環境までも設計することが現代社会には求められる。それが「状況を建築する」である。

遠藤氏は2016年8月、新大阪美術館のコンペにおいて見事に最優秀賞を獲得した。遠藤氏のコンペに対する姿勢は、どのコンペもどのように準備していくかが重要である。建築は時間がかかるものであり、その設計にたどり着くまでも時間がかかる。未来に向けてどう準備して行くか、見えないものに対してどう準備して行くかが重要であると遠藤氏は言う。また多くのコンペや実施設計をこなす中で遠藤氏はあることに気づく。それは建築が大きくて小さくても変わらないもの、つまり手法があるのではないかと。新大阪美術館においては、遠藤氏が設計した美山の家からその手法が適用されている。その美山の家のテーマは「開かれた場所と閉じられた場所」であり、その形態と外観、テーマが新大阪美術館に応用されている。それが遠藤氏の言う手法の適用である。手法が何であるかを見つけ出し、またそのリサーチした手法をどう街に適用して行くかに興味があると遠藤氏は言う。

新大阪新美術館のコンペでは、敷地調査から始まり、約40個のスタディをインターンの学生と共に行った。その40個のスタ

ディから答えを見つけ出し、形を次第に明確化する。このスタディは遠藤氏の一つの手法であり、複数の解答から確実に不正解な解答を徐々に省き、この敷地での正解となる建築へ近づけていく手法である。またこの手法では一つの敷地に複数のパターンがあるため、あらゆる可能性が生まれ、新しい建築の可能性が含まれている。

また周辺敷地において終始変わらなかったことが、敷地の西側であった。将来、何が建つか分からずの状況で、これに対してどう準備するかがとても重要であり、特に都市の中で建物を作る場合、隣地は選べない。また師である原広司先生は「見通せない未来をどう見通すか」と話していたと言う。都市は分からないものであり、都市は見通せないものだと自覚を持っておくことが重要であると遠藤氏は言う。こういった周辺敷地のリサーチ状況からこの建築は周囲に対して開き、接続可能な状況を設計するという回答を選んだ。

遠藤氏は今回の講演においていくつかの建築を紹介し、それらのコンセプトなどを話したが、どの建築のコンセプトにおいても人のアクティビティというフレーズが共通して見つけられた。遠藤氏は建築において主は人であると言う。このコンセプトは遠藤氏のどの建築においても繋がり続けている。建築空間を作る上での手法も進化し続け、それは過去の建築作品と繋がっていることが遠藤氏の建築の中から見えてくる。遠藤氏は学生時代からの活動と今の活動においてもずっと繋がっていて、また今と将来も繋がっていると強く学生達にメッセージを発信した。このことは学生達に対して将来何をしたいのかと考えた時、今、何をしているのかがすごく重要であるということを訴えている。



遠藤 克彦 | Katsuhiko Endo

建築家/遠藤克彦建築研究所

1970年横浜市生まれ。1995年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了(原広司研究室在籍)。1997年遠藤建築研究所設立(現株式会社遠藤克彦建築研究所)。2015年より日本大学理工学部建築学科非常勤講師。設計事務所では住宅から公共建築、そして街づくり提案まで多岐に渡るプロジェクトを手掛けており、数々の賞を受賞している。2017年2月の(仮称)大阪新美術館公募型設計競技にて最優秀案に選定され、大阪オフィスを開設して基本設計が進行中。

私たち第41回神戸建築学実行委員会は、講演会の2ヶ月ほど前から遠藤克彦さんの事前学習を進めてきました。その中で学んだものと、講演会の内容をリンクさせながら、遠藤氏の建築に対する手法や考え方に対して私たちが考えたことを今回、大崎がまとめ、述べさせていただきます。

今回の講演では、大学生に対して強いメッセージが込められているように私は感じました。例えば、講演会の内容にあった60個以上に渡るコンペやプロポーザルをやってきたというのは、設計ができる力を身につけるためであり、敷地を見て案を考え設計するというトレーニングを積んでいくという内容でした。これは設計の基礎的な部分をしっかりと一から学び直している姿勢が見られ、私たちにも常に設計において基礎からのトレーニングの必要性を感じました。また私たちが課題等で設計する際においても共通して考えていることや、好みのデザインなどは数を通して気づく点があり、それがいわゆる遠藤氏の手法というものに近い物と考えられ、スタディの事とも共通点があるように思えました。膨大なスタディを行うことで何が誤りで何が良いかを気づくようになるといったことでした。この内容は学生の僕たちにとってもスタディの重要性を気づかせた重要な話であったと思います。

また大阪新美術館のコンペにおいて、敷地調査に行かれた話では、敷地の重要性についてお話をされました。敷地で何を見つけ、何を持って帰って来るかが重要であり、それが構想の根元になるとお話し、建築を設計する上での基礎的な部分である敷地の重要性を再認識することとなりました。

この話は質疑応答の時間にも場所性と言う言葉で質問がありました。敷地と場所性と言う言葉はどちらも似た意味合いである時とそうではない時があるように思えます。それはある場所や時代において、言葉の意味の解釈が変わる場合があるからです。遠藤氏はこの場所性において「場所性は現代において建築家が考えるべき宿命である。土地は動かないが、建築家は常に動いている。建築家が持つ時代性や背景などといった手法が持ち込まれ、建築に投影される。」と答えておられました。敷地というキーワード



に対しては、建築家は敷地に対し、どの時代においてもクリアな回答を示していると思われますが、場所性は時代によってそれが考慮されたり、あまり考慮されていなかったりということがあるように思えます。それはモダニズムであったり、ポストモダンといった時代が建築と場所性の関係を示しています。これからの未来はかつてのモダニズムと類似してAI等による機械主義的な建築が作られると仮定した場合、場所性の持つ建築というものがモダニズムの時同様に失われていくかもしれません。現代建築と新技术がうまく融合した建築が生まれることは良いと思いますが、建築と場所性がうまく融合した建築がそれによって消滅することなく、うまく共存していくことが文化の存続であったり、記憶を通して人と場所が繋がるためにも重要ではないかと思います。

最後に遠藤氏は学生に対して「今やっていること、将来のやっていることは必ず繋がっている」とお話しされ、この内容は遠藤氏自身が学生時代と今やっていることに大きな違いはなく、常にリンクしているということでした。それらは大学時代の経験が社会人になっての活動の土台や、理論の根本になっているということを私たちに伝えてくれているような気がしました。私たち自身も今考えていること、やっていることは無駄にはならず、将来の答えを探すためにとても重要なスタディであると思います。遠藤氏の建築を作る手法であるスタディはまさに私たちの生きる上においても重要な考え方であると思いました。(大崎真幸)



[日時]

2017年10月20日(金)

[司会・進行]

遠藤秀平(教授)

[担当学生]

大崎真幸 小林諒 佐野旭 田川美那海 中井修二 東美弦 松井智美

松田星斗 山本修大 山本雅則(M1)

中島安奈 松井優香(B3) 横山舜 吉川文乃 Yoo Gyung Yang (B2)

## 空間を思考する～現代における共同体論～

**内田 樹** 思想家 / 凱風館館長 / 神戸女学院大学名誉教授

**光嶋 裕介** 建築家 / 光嶋裕介建築設計事務所主宰 / 神戸大学客員准教授

### 講演会の内容

私は事前に内田先生の「街場の共同体論」を読み、先生が考える共同体についてイメージをつかんで講演を聞いた。人間は家族や学校、友達間など様々な共同体に所属しているが、現代では「一人でも生きられる社会」が標準化されており、「他者と共生する能力」を育てる努力を怠ってしまったため、人と人の関係性が変化してきているという。例えば学校では個人それぞれの良さを尊重しながら共に学ぶのではなく、普通と違う行いをするといじめられるからみんな同じ行動をする傾向にあり、また社会では周囲の人を頼ることは他者に迷惑をかけることになるため極力頼らずに一人で解決しようとする傾向にある。こうして共同体は破綻してきている。

しかし一方ではSNSの普及などによって2次元的な共同体は広がりを見せている。部屋に一人でいるプライベートな時間でもSNSで外部と繋がっていたり、一方でまちを歩いていたり満員電車に乗っていても誰も気にかけてくる人はいないという風にパブリックとプライベートの反転が起こっていると捉えることもできる。こんな社会において1番のプライバシーは頭の中にあると内田先生は対談で話していた。写真や生年月日など自分の情報をすぐに発信できるしパブリックとプライベートもあいまいになっている現代において、思想や意志は自分だけが持っているものであり、発信しなければ始まらないし、発信したものを受け取って初めて価値を得られるという。

また、建築家は空間にコンセプトや何十年後まで残るメッセージを込めるが、人々は空間を通すことで身体性でそれらを読み取り、自然の力や神など人間をはるかに超える存在に対して思いを

巡らす。例えば神社では、手を打ち頭を下げ手を合わせるという行為や経験を通して、神社の向こう側のご神体や神という存在に対して内発的な畏れを身体的に表現している。内田先生は共同体の例として自身の道場を挙げ、「共同体とは常にだれに対しても開かれていて、中枢がなくても動くことが出来る」と述べている。その場所が持つ経験や記憶、経緯に対してそれぞれ空間に立つ人間が愛着を持ち、これら数値化できないものを共有し受け継ぐことで空間が共同体となるという。人は共に体を動かしたり、共通の空間体験や思い出を経験することで仲間意識が芽生え、共同体を作り上げることが出来るため、建築は共同体化を引き起こすきっかけになる可能性を持っているのではないかと私は考えた。

近年共同体が破綻してきている中で、シェアハウスや住み開きのように他者と生活を共有するスタイルやサードプレイスでの交流が増えていることについて街場の共同体論ではどう論ずるか気になったのだが、対談で内田先生が話していた「シェアハウスという共同体は成立しない」という考え方方が衝撃的だった。シェアハウスは生活を共有することで利便性が高まるため成立するのであり、利便性が無くなると破綻してしまう。一方、共同体は先に述べたように数値化できない経験や学業や知識を次に受け継いでいくという、時間を貫く縦軸を持つため、利便性等に関係なく受け取る一人一人の身体が存在する限り破綻することはない。つまりシェアハウスは他者との共生であり、一見「一人でも生きられる社会」に反するもの見えるが、実際は利便性というお互いの利害一致によって成り立っている関係に過ぎず、昔ながらの持ち

**光嶋 裕介 | Koshima Yusuke**

建築家 / 光嶋裕介建築設計事務所主宰 / 神戸大学客員准教授

1979年米ニュージャージー州生まれ。2002年早稲田大学理工学部建築学科卒業。2004年早稲田大学大学院修士課程建築学専攻修了。  
2004-08年ザウアブルッフ・ハットン・アーキテクツ(ベルリン)に勤務。2008年光嶋裕介建築設計事務所を開設。2016年神戸大学客員准教授。  
主な作品に、『凱風館』(2011)、『旅人庵』(2015)など多数。主な著書に、『みんなの家』(アルテスパブリッシング)、『建築武者修行』(イースト・プレス)、『建築という対話』(筑摩書房)など多数。



**内田 樹 | Uchida Tatsuru**

思想家 / 凱風館館長 / 神戸女学院大学名誉教授

1950年東京都生まれ。1975年東京大学文学部仏文科卒業。1982年東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。  
専門はフランス現代思想、武道論、教育論、映画論など。  
主な著書に、『ためらいの倫理学』、『下流思考』、『ぼくの住まい論』など多数。『私家版・ユダヤ文化論』で小林秀雄賞受賞。『日本辺境論』で新書大賞受賞、著作全般に対して伊丹十三賞受賞。神戸市で武道と哲学のための学塾『凱風館』主宰。

つ持たれつやおせっかいで繋がっていた共同体とは全く異なる集団であるのだ。

例えば、実家のリビングを想像してみると、法令などに縛られない公共性を持ち、家族それぞれの思い出や共通の記憶が家具や部屋自体に含まれており、またリビングのソファに座るだけでそれらが思い出されたり、あるいはダイニングの席の割り振りが自然に決まっていたりする。ある程度の公共性を持ち、数値化できない経験や記憶とその対象物があり、身体性を誘発させるような空間に、その場を整えることが出来る人間と身体感受性で受け取ることのできる人間が存在することによって共同体というものは成立しているのではないかと思った。

(M1 東美弦)



にこだわったのは書評ページです。「思想」「街場シリーズ」「まわりと生きる」「学び」「日本」「凱風館について」の5つにジャンル分けをして学生スタッフによる内田さんの書評を載せました。当日聞きに来てくれる建築学生にも興味を持ってもらえるようにタイトルを工夫したり内田さんへの質問を書くことで講演会に主体的に参加するように促すなど工夫を凝らしました。また、内田さんと光嶋さんの関係や光嶋さんの建築作品を紹介するページも作成し充実した配布資料を作ることができました。

スタッフは学部2回生から修士1回生までいましたが、学年に関係なくみな同じレベルで思考をし、講演会をつくりあげることができました。以下、2回生の学生スタッフの所感を記しておきます。

(M1 田川美那海)

\*\*\*\*\*

事前準備では読書会を行いました。そこで建築学生として内田先生の本の解釈について議論できたことは新鮮で勉強になりました。中でも「日本辺境論」は特に刺激的な一冊でした。

(B2 横山舜)

今回、内田さんの本を建築的に解釈する読書会を通して、学年を超えて意見の交換が出来たのは貴重な体験でした。講演会では建築の専門家ではない視点から、空間と人間の振る舞いとの関係性やこれから公共性についてお話し頂き、今後考えていくべき課題を発見できました。

(B2 吉川文乃)

\*\*\*\*\*

### 講演会の企画・運営

私たち第42回神戸建築学実行委員会は、講演会の3ヶ月ほど前から準備を進めてきました。これまでの神戸建築学では著名な建築家・建築分野の研究者をゲストにお招きしておりましたが、今回は初めて建築分野以外の専門家の方のお話を伺う機会となりました。講演内容を企画するにあたり光嶋さんと打合せを行い、学生スタッフが一人一冊内田さんの著書を読み、建築的に解釈できる部分を引用しそれについて意見をまとめることにしました。光嶋さんと学生スタッフが集まりそれぞれの意見を共有する「読書会」という機会を設け、講演内容について話し合いをしました。内田さんの共同体のつくりかたから様々な人の集い方が学べるのではないか、いろんな共同体の中にある一人の自分のあり方を考えることができるのではないかという意見が出て、講演会のタイトルを「空間を思考する～現代における共同体論～」に決定しました。このようにして、「人間」のことを考える思想家・内田樹さんと「空間」から「人間」のことを考える建築家・光嶋裕介さんとの対談という今回の神戸建築学の骨組みを組み立てました。

また、同時に講演会当日の配布資料作りも進めました。今回特

